

児童が相手意識をもってコミュニケーション活動をする外国語活動の授業を提案します！

1 研究の概要

(1) 研究主題

思考力・判断力・表現力等を育成する外国語活動の授業づくり
 一児童が相手意識をもってコミュニケーション活動をするための単元構成の工夫を通して一

(2) 研究主題設定の趣旨

○社会的背景と外国語活動・外国語の学習指導要領改訂の方向性

現在、社会は加速度的に変化し、グローバル化は世界に多様性をもたらしてきています。グローバル化が進展する社会の中では、世界と向き合い、他者と協働しながら新たな価値を生み出していくことが求められています。自国の文化の良さを見つめ、他国の文化にも関心を寄せながら、多様性を尊重する態度を身に付けたり、共生社会の実現に必要な他者への共感や思いやりを育てていく必要があります。新しい時代を切り拓いていく子供たちにも、日本文化や異文化を理解し、多様な人々と協働していくことができるようになることが求められています。

このような社会的背景の中、小学校における外国語教育について、中央教育審議会が示した「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」⁽¹⁾では、小学校高学年において、教科として系統的な指導を行うためには、年間70単位時間程度の時数、中学年における外国語活動については、従来と同様に年間35単位時間程度の時数が必要であるとの方向性が示されました。

	現行学習指導要領	➔	次期学習指導要領
中学年	/		外国語活動 年間35単位時間程度
高学年			教科：外国語 年間70単位時間程度

また、小・中・高等学校を通じて、外国語活動・外国語科において育成を目指す資質・能力について、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱を整理した資料⁽²⁾が示されています。既得の知識や経験、新たに得られた知識を言語活動へつなげ、「思考力・判断力・表現力等」を高めていくことが大切になるといわれています。そのために、児童が言語活動の目的や使用の場面を意識して行うことができるよう、具体的な課題等を設定し、その目的を達成するために、必要な語彙などの言語材料を取捨選択して活用できるようにすることが必要になってくると考えます。

○児童の外国語活動に対する実態

文部科学省が平成26年度に全国の小学校で実施した、小学校外国語活動実施状況調査の結果⁽³⁾を見ると、小学校5、6年生の72.3%が「外国語活動の授業が好き」と回答しています。また、中学校教員の92.6%が、外国語活動導入によって「英語を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」の成果が現れたと回答しており、児童の変容を肯定的に捉えています。

授業に対する意識では、「外国語活動の授業に進んで参加している、どちらかといえば進んで参加している」と回答した児童は71.4%でした。しかし、「外国語活動の授業の中で楽しいと思うことはどのようなことですか」という問いに、「英語で友達や先生等の人の意見を聞くこと」と回答したのは59.5%にとどまりました。外国語活動に肯定的な児童の割合が大きいことから、小学校での外国語活動が成果を上げていると思われる一方で、相手に積極的に関わろうとする気持ちや、積極的にコミュニケーションを図ろうとするまでには至っていない児童の姿が見えてきます。

自分自身の指導を振り返ってみても、児童が相手に関心をもってコミュニケーション活動を楽しんでいたり、伝えようと主体的に思考していたりすることが、いつもできていたとはいえません。しかし、相手に伝えたい具体的な課題を設定するようにすると、積極的に伝えようとする児童の姿が見られるようになってきました。

児童が言語活動の目的や場面を意識して、伝えたい内容に合う言葉を選んで表現し、積極的に相手と関わろうとするようになるためには、相手と向き合い、相手に関心を持ち、自分が伝えたいことを、どの言葉を使ってどのように伝えようかと思考する必然性のある場面を設定することが大切であると考えようになりました。

○本研究の目的

本研究では、教科化を見据えて、「育成すべき思考力・判断力・表現力等」に着目しながら、児童が積極的にコミュニケーションを図ろうとする場面設定を工夫した単元を構成し、ゴールの姿を児童と共有することを通して、児童が相手意識をもって思考を働かせ、使う外国語の表現を選び、表現する指導の在り方を探っていきます。

単元の初めに、児童と共にどんなゴールを設定したいかを決めます。単元のゴールには、友達へ伝えたい事柄だけでなく、相手へのメッセージを加えて伝えるパフォーマンス課題を設定します。児童は、ゴールに向かって、どうすれば相手に自分の思いがより伝わるか、相手の思いをより理解できるのかを思考するであろうと思われます。一人一人が互いの異なる特性や背景を尊重し、共に過ごしてきた生活を見つめ、その中から相手に伝えたいことを選び、相手に向き合って伝えることで、「自分の思いが伝わった」「伝えることで、相手が喜んでくれた」「相手の思いを理解できた」という気持ちが高まると考えます。さらに、言葉とは人を理解するためにあり、自分の伝えたいことを理解してもらうためにあること、そして自分の思いを相手にうまく伝えることの大切さや楽しさを感じるであろうと考えます。相手を理解し、表現するコミュニケーションを図ることで、思考力・判断力・表現力等が高まるのではないかと考え、本研究主題を設定しました。

(3) 研究の目標

単元のゴールに、児童の思いや考えを伝えるパフォーマンス課題を設定した単元を構成し、積極的にコミュニケーションを図ろうとする場面設定を工夫することを通して、児童が相手意識をもって思考を働かせ、伝えるためにどの外国語等を使うのか判断して表現する力を高める指導の在り方を探る。

(4) 研究の方法と内容

① 外国語活動における思考力・判断力・表現力等を高める指導についての理論研究

外国語活動における思考力・判断力・表現力等を高める指導についての先行研究や文献等を基に、

情報収集や理論研究を行いました。

② 児童が相手意識をもってコミュニケーション活動をするための単元構成の提案

児童の外国語活動に関する意識の現状把握のため実態調査及び分析を行い、それに基づき、思考を働かせる場面を仕組んだ単元を構成し、相手を理解し、自己を表現する外国語活動の授業を提案しています。

③ 検証授業の実践と思考力・判断力・表現力等を高める指導についての有効性の検証

第 6 学年の単元において検証授業を行い、児童への事前事後のアンケート分析や毎時間の振り返りカードの記述、児童の行動の評価をし、有効性を検証しました。

《引用文献》

- (1) 中央教育審議会 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』 平成28年12月 p. 198
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf
- (2) 中央教育審議会 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』 平成28年12月 別添13-1
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/20/1380902_3_3_1.pdf
- (3) 文部科学省 『平成26年度小学校外国語活動実施状況調査の結果』 平成27年 2 月
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/09/24/1362168_01.pdf